

二つの故郷の間で揺れ動く、日系ブラジル人の若者たちの知られざる青春

「孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～」

東京上映支援上映会

「日本で将来の夢はない、ブラジルに帰っても外国人あつかいされる・・・」

そんな日系ブラジル人の子供たちが静岡県浜松市にはたくさんいる。彼らは幼い時、デカセギの親と共に日本にやってきた。日本で生まれ育っても、ブラジル国籍のため義務教育が保障されておらず、多くの子どもたちは中卒か、中学も中退して、工場で働いている。夢があってもそれを叶えるすべを知らず、安定した仕事にもつけない。しかし彼らは、どんなにつらくても、生き生きとして、底抜けに明るい。2008年秋、突然、おとずれた不況で仕事を失い、ブラジルに帰ることを余儀なくされる。そこには、あきらめきれない夢、引き裂かれた愛、そしてもう一つの故郷でやり直そうという思いがあった・・・。

「孤独なツバメたち」は、浜松学院大学の津村公博教授と映画監督・中村真夕が浜松そしてブラジルで孤独な渡り鳥のように、自分の居場所を求めて生きようとしている5人の若者たちの2年半を追ったドキュメンタリー。

この映画の上映に、映画に登場する青年たちと同じような状況に置かれた日系ブラジル人の青年たちのグループ・Minority Youth Japan (MYJ 代表: パブロ・ナダヨシ・ロリン)が、自分たちの声を全国に伝えようと、現在、動き始めています。東京、浜松、ブラジル、アメリカでの上映が決定し、さらに全国での上映に向けて活動の輪を広げています。この映画を全国に広めていくことが、マイノリティーの若者たちの力となり、彼らの存在を社会に認知してもらうきっかけとなります。映画の興行利益の一部は MYJ の活動資金になります。是非、ご支援のほどよろしくお願いします。

【上映日時】

2/13(月)14:00 スタート(13:30 より受付開始)

14:00-15:30 ドキュメンタリー映画上映

15:30-16:30 トークイベント - 司会: 二宮正人 (サンパウロ大学教授)、

参加者: 三田千代子 (上智大学)、パブロ・ナダヨシ・ロリン (MYJ 代表)、他ゲスト

16:30-17:30 懇親会

入場: 無料 (出欠を同封の返信用ハガキで2月3日までにお送りください)

会場: 駐日ブラジル大使館 港区北青山2-11-12 TEL:03-3404-5211

東京メトロ銀座線: 外苑前駅3番出口より徒歩10分

MAP: <http://www.brasemb.or.jp/embassy/access.php>

(スタッフ) 監督: 津村公博、中村真夕 プロデューサー: 津村公博 撮影: 中村真夕、津村公博、村井隆太、木村伸哉、佐藤アユミ・パウラ 編集: 中村真夕 支援: 国際交流基金 提供: 浜松学院大学地域共創センター / Minority Youth Japan 2011年 / 日本、ブラジル / 日本語、ポルトガル語 / DV / カラー / 88分

【お問合せ】配給宣伝: アルゴ・ピクチャーズ(熊谷)

TEL03-3584-6237 FAX03-3584-6238 mail@argopictures.jp

劇場用ドキュメンタリー映画

「孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～」

二つの故郷の間で揺れ動く、日系ブラジル人の若者たちの知られざる青春

「日本で将来の夢はない、ブラジルに帰っても外国人あつかいされる・・・」

そんな日系ブラジル人の子供たちが静岡県浜松市にはたくさんいる。彼らは幼い時、デカセギの親と共に日本にやってきた。日本で生まれ育っても、ブラジル国籍のため義務教育が保障されておらず、多くの子どもたちは中卒か、中学も中退して、工場で働いている。夢があってもそれを叶えるすべを知らず、

安定した仕事にもつけない。しかし彼らは、どんなにつらくても、生き生きとして、底抜けに明るい。

2008年秋、突然、おとずれた不況で仕事を失い、ブラジルに帰ることを余儀なくされる。そこには、

あきらめきれない夢、引き裂かれた愛、そしてもう一つの故郷でやり直そうという思いがあった・・・。

「孤独なツバメたち」は、浜松学院大学の津村公博教授と映画監督・中村真夕、そして日系ブラジル人の青年たちのグループ・Minority Youth Japanの共同製作で、浜松そしてブラジルで孤独な渡り鳥のように、自分の居場所を求めて生きようとしている5人の若者たちの二年半を追ったドキュメンタリー。

Story ーストーリーー

2008年夏、浜松学院大学の津村公博が行っている週末の夜の調査に、テレビの取材でディレクター・中村真夕が同行したことからこのドキュメンタリーは始まった。土曜日の夜、行き場がなく街をたむろっている日系ブラジル人の青年たちに声をかける。そんな夜の街で出会ったのが、19歳の青年・エドアルドだった。日本とブラジルを行ったり来たりして育ったが、日本の中学校を中退し、16歳で工場で働き始めた。「親は自分みたいになっちゃダメって言う。工場で働いても何も学ばないし、未来もない・・・」エドアルドはブラジル人の中学生のための進学教室で英語を始める。しかし不況のために工場での仕事を失い、一時は帰国も考える。そんな時、もう一度、日本でやり直すチャンスを得る。15歳の少女・パウラも夜の調査で出会った若者の一人だった。日本で生まれ育ち、ブラジルには行ったことがない。中卒で工場で働いていたが、家族と共に帰国することになってしまう。ブラジルに帰っても恋人と関係が続けようとするパウラだが、彼女にはつらい試練が待っていた。19歳のユリは、車上荒らしで捕まり、一年間を少年院で過して帰ってきた。しかしずっと裏切り続けた父との和解を求め、出所後、数週間で帰国を決意する。22歳のコカは、デカセギの青年たちのダンスチーム・フラワーモンスターズのリーダー。チームは地元で有名になるが、彼もまた不況のため仕事を失い、家族と共に帰国を余儀なくされる。「むこうで技を磨いて、必ず帰って来る。それまでフラワーを続けてくれ」と残されたメンバーにグループを託して帰国する。数ヶ月後、解散寸前だったチームに元のリーダーのオタビオが戻ってきて、チームは再起動する。しかしまた数ヶ月後、今度はオタビオが帰国することになってしまう・・・。

「孤独なツバメたち」はデカセギという運命に翻弄されながらも、明るく、強く生きる日系人の若者たちの姿を追ったドキュメンタリー。

History - 歴史的背景

1911年以降、多くの日本人たちが出稼ぎとしてブラジルに渡ったが、過酷な状況のためにその多くは日本に帰国できずブラジルに定住した。時は流れ、1990年代以降製造業の労働者不足を補うためにブラジルに渡った出稼ぎの日本人を祖先とする日系人たちが、デカセギ労働者として日本にやってきた。一時は30万人以上の日系ブラジル人が全国に住み、中でも浜松市にはもっとも多くの日系ブラジル人が住んでいる。彼らは主に自動車産業輸出関連の工場に派遣労働者として働き、家族を呼び寄せて日本に定住する者も多い。

デカセギの親たちと来日した子どもたちは、外国籍のため義務教育制度対象外にあり、子供たちの中には中学校中退で働いている16歳以下の子どもたちもいる。2008年に起こったリーマンショックの影響で、派遣労働者として働いていた多くの日系ブラジル人は仕事を失い、帰国を余儀なくされている。長年、日本で育った日系ブラジル人の青年たちは家族、友人、恋人と別れ、ブラジルに帰国しないといけない辛い試練に晒されている・・・。

(スタッフ)

監督: 津村公博、中村真夕 プロデューサー: 津村公博 撮影: 中村真夕、津村公博、村井隆太、木村伸哉、佐藤アユミ・パウラ 編集: 中村真夕 支援: 国際交流基金 提供: 浜松学院大学地域共創センター 配給: アルゴ・ピクチャーズ 2011年/日本、ブラジル/日本語、ポルトガル語/DV/カラー/88分

Cast-登場人物

佐竹エドアルド（19歳）日系4世、サンパウロ州、サンパウロ市生まれ

～まっすぐ生きようとするが、生きられない青年～

8歳のころに父親を失い、母親と二人で生きてきたエドアルドは、いつも誰にも頼らず一人で強く生きてきた。幼い頃からブラジルと日本を行き来して育ち、日本の小中学校に行くが、母親を助けるために中学校を中退して働き始める。母親は再婚相手との間にできた幼い娘と暮らすためにエドアルドを一人残して数年前にブラジルに帰国。エドアルドは高校に行っていないが、ブラジル人の中学生に英語を教え、工場働きながら、自分で勉強して大学に行くことを夢見ていた。しかし、突然の経済不況で仕事を失い、帰国を考えるエドアルド。そんな時、彼はブラジル人のための日本語教室のコーディネーターの仕事を得て、日本にとどまることを選ぶが、そんな彼にまた大きな試練が訪れる…。

鈴木ユリ（20歳）、日系4世、ミナスジェライス州、

ゴベルナドル・バラダレス市生まれ

～父親の姿を追い求める青年～

10歳の時に両親と弟と来日。中学で非行化しはじめ、地元で有名な暴走族に入る。「集団危険行為」で捕まり、16歳の頃、半年間初等少年院に入る。その後、南米人のギャングを結成する。ホストとして働いたり、車上荒らしを繰り返し、18歳の頃に再び中等少年院に入る。1年後、退院。数週間、ブラジルに帰国することを決意。そこには自分を見捨てた父と和解したいという思いがあった…。

佐藤アユミ・パウラ（15歳）、日系4世、静岡県菊川生まれ

～夢をあきらめず、前に歩み続ける少女～

日本で生まれ育った日系4世。幼い頃から、共働きの両親の代わりに兄や弟の食事を作っていた。仕事で疲れた母親から殴られることもしばしばあった。11歳の頃、ミス日系のコンテストで注目され、モデル事務所にスカウトされ、東京でモデルとして仕事を始める。しかし9歳年上の日系人の恋人から自分かどちらかを選べと言われ悩む。その板ばさみで結局、事務所を解雇されることになる。そして15歳で妊娠するが、流産してしまう。その後、中卒で自動車関連の工場に働き、新しい恋人にも出会い幸せな日々を送っていたが、ある日、突然、両親がブラジルに帰国すると言い始める。家族と一緒にいたいと思いつつも、生まれ育った日本を離れ、恋人や友達と別れることに苦悩するパウラ。そして彼女は、見知らぬ祖国に家族と共に帰る決心をする…。

コカ（松村エドアルド 22歳）日系4世、パラ州、カスタニャウ市生まれ

～ダンスに夢をかける青年～

ヒップホップのダンスチーム・フローモンスターズのリーダー。三歳の時に両親と弟・サウロと来日し、日本とブラジルを行ったりきたりして育つ。中卒で工場に働いていたが、アルコールに溺れる。そんなとき、ヒップホップダンスに出会い、生きる目的を見出す。オタビオ率いるフローモンスターズのメンバーとなり、浜松でも一目を置かれる存在となる。オタビオが交通事故でチームを脱退後、リーダーとなりチームを支えていくが、突然の不況により家族全員が仕事を失い、ブラジルに帰国を余儀なくされる。半年後、必ず帰ってくると約束し、チームを残りのメンバーに託して、日本を出るが…。

カルピノ・オタビオ（22歳）日系4世、サンパウロ州、カンピーナス市生まれ

～チームを信じ続ける青年～

ヒップホップのダンスチーム・フローモンスターズの初代リーダー。

幼い頃、両親と弟と妹と来日。掛川駅から日系ブラジル人のヒップホップのダンスチーム・フローモンスターズを結成する。デカセギで流動的な青年たちのグループを8年間続けてきたが、練習の帰りに交通事故に遭い生死をさまよう大きな怪我を負う。昏睡状態の末、奇跡的に助かる。この時にキリスト教を伝えたいと決心する。その後、ダンスができるまでに回復するが、しばらくチームを離れて、教会でダンスを教えるようになる。そんな時、コカがチームを離れることを聞き、フローモンスターズの残りのメンバーたちになんとかダンスを続けさせようと戻ってくるが、チームはまた大きな試練をむかえる…。

Directors –監督

中村真夕(なかむら まゆ)監督・撮影・編集

1973年、京都生まれ。

16歳の時に単身で留学し、高校、大学をロンドンで過ごす。

1996年に渡米し、コロンビア大学大学院を卒業。

2001年に平成13年度文化庁芸術家在外研修員に映画監督として選出される。

2004年、ニューヨーク大学大学院映画科を卒業。

2005年、文化庁と国際交流基金の助成金を受け、葵プロモーションの製作で劇映画「ハリヨの夏」を撮影する。本作は2006年度釜山国際映画祭コンペティション部門に正式招待され、シネマート六本木他で全国公開される。現在、劇映画三作目「親密な他人」を準備中。

津村公博(つむら きみひろ) 監督・撮影・プロデューサー

浜松学院大学教授

多文化教育・第二言語習得理論の研究を専門とする。

2006年より、浜松を中心に、夜間路上で日系ブラジル人の青年たちに声をかけ、彼らの生活実態を調査している。また日系ブラジル人の青少年年たちの教育支援にも力を入れ、日系ブラジル人の中学生のための高校進学塾「アクアレラ」を設立。その後、2009年より日系ブラジル人の青少年ための学び直しの教室「ジュントス学び直し教室」を浜松市の助成を受けて運営し、日系ブラジル人の青年たちが日本の社会の一員として生きていけるための支援を続けている。

Minority Youth Japan

2008年に浜松学院大学の学生たちを中心に結成された日系ブラジル人、フィリピン人、日本人の若者たちのグループ。マイノリティーの若者たちが、様々な活動を通して社会人としての基礎能力を高めることを活動の目的としている。これまでに映像制作、外国人のソフトボールチームの設立、世界の平和を願うフリーハグなどの活動を通して、浜松から全国に多文化共生の未来を発信している。